
Sunflower

水乃霰

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sunflower

【Nコード】

N5604J

【作者名】

水乃霞

【あらすじ】

貴方は明日を信じていますか？

『太陽は明日も昇るから』そう言って笑ったあいつに、もう明日が来ることはない。

あの頃、僕達は目的も知らず知ろつともせず戦いを続けていた。

世の中には戦いが溢れていて、子供だった僕達も、もちろん武器を持って戦っていた。

仕方のないことだと割り切っていたつもりだったけど、想いの全てを殺すことは不可能だった。

仲間の死んだ日、多くの敵に手をかけた日。

そんな日の夜は皆泣いていた。

ほとんどの子は涙を流すだけだったけれど、中にはヒステリックに泣き叫ぶ様な子もいて、そんな子をいつも慰めていたのはあいつだった。

『大丈夫。君は悪くない、悪くないから』

『つつわああああ』

『大丈夫、大丈夫だから』

不思議とそういわれると皆落ち着き始める。

それから、涙の止まった子に空を見上げながら『太陽は明日も昇るよ』とあいつは言った。

希望を、願いを、祈りを込めるように。

珍しく戦いのなかったある日、宿営地の近くの丘に涼みに行った僕は、空を見上げるあいつを見つけた。

『なあ』

隣に腰を下ろしながら声をかける。

『うん？』

あいつは突然の声で少し驚いた様に、振り向いた。

『何してる？』

『空、見てるんだ』

『…何かあるのか？』

『別に、何かあるとかじゃないけど。しいて言うなら、太陽かな』
『お前、いつも太陽が昇る、とか言ってるからな。そんなに太陽が好きなのか？』

『太陽は明日も昇る、だよ。好きっていうかさ、元気出るじゃないか。今苦しくても、明日には希望が待ってるかも知れない。毎日昇ってくる太陽みてたらそう思えるから』

君は、そう思わないかい？笑顔をみせながら、あいつは僕に尋ねる。

『夢なんか見てんなよ』

『見てはいけない？』

『つらいだけだろ』

『そんなことない。…まあ、そういう考え方が普通なのもわかるよ。でも願いが無いほうがよっぽどつらいと、私は想う』

なんだか無性に腹が立って仕方がなかった。
強がりじゃなく、未来を信じられるあいつが嫉ましかったのかも知れない。

『お前みたいな奴、僕は嫌いだよ』
『そう…別にいいよ。嫌っても』

嫌いだと言われても笑っていられるあいつに、どうしてだと問いた
い気持ちに駆られたけれど、何故か言葉は出なかった。

次の日には、また戦いの日常がやってきた。
夜には皆が泣き、あいつが慰める。
そんな変わることのない日常が…。

そういえば、とふと思う。あいつの泣いているところを僕は見たこ
とがあっただろうか。

僕も人前で泣くことは少ないけれど、あいつはいつも人を慰めてい
るばかりだ。

近くからまた『太陽は明日も…』と聞こえてくる。

本当に、そう信じるだけでいつ死んでもおかしくないこの場所で、
笑っていられるのだろうか。

僕もそんな風に、ないに等しい未来を信じられたならあいつと同じ
ようになれるだろうか…。

数ヵ月後、未だ僕達は戦場^{いく}にいた。むしろ、以前よりひどい状態で。
耳を、頬を、腕をいくつもの銃弾が掠め、さっきまで話していた奴

が凶弾に倒れていく。

地獄のような場所で、絶望に感覚を麻痺させて、銃を撃つ。

夜の帳がおりる頃、ようやくその地獄は終わった。

銃声は止み、両軍に撤退命令が下る。

暗闇の中宿営地に戻っている時、傍にあいつがいることに気が付いた。

空を見上げながら、あいつはつぶやいている。

「大丈夫、大丈夫…太陽は明日も昇る…」

いつもとは違い、その顔に笑顔はなく、まるで自らに言い聞かせている様で…。

ああ、あいつも絶望に耐えようとしているのか…。

ただ、強いだけじゃない、そうわかると僕は逆にあいつの言う明日を、本当に信じてもいいかもしれないと思えた。

つらくても、今この現実には絶望するよりは、その方が…。

「なあ」

いつかと同じように声を掛ける。

「なに？」

「お前まだ、明日を信じてるか」

「…信じてるよ」

「そっか」

「それが、どうかした？」

「いや…別に」

「何それ、変なの」

「へん、て。お前よりましだろ」
「そうかもね」そう言っただけはまた空を見上げた。

パンッ

一発の銃声が、妙に鮮明に耳に残った。
そして、隣にいたあいつはゆっくりと倒れていった。
僕には一瞬何が起こったのかわからなかった。

撤退命令が下ったのではなかったのか。
戦いはもう、終わったはず…。

ドウシテ、ドウシテ、ドウシテ

『日向葵ひまわりっ
』

初めて、あいつの名を呼ぶ。こんな時に、皮肉なものだと思った。
目の前の状況に、思考は追い付かず、ただどうにかしなくてはとい
う気持ちだけで…そうしている間にも日向葵の背中から、腹部から、
脈打つようにゴボリと血が溢れだす。

『…っ
』

『日向葵っ、日向葵！大丈夫か』

一目で平気なはずがないとわかっていたのに、尋ねずにはいられない

かった。

『痛い、だい…じよぶ…じゃな…いか…も』

体を銃弾が貫通して、ここの設備で助かった奴は、いない。

『死ぬなよっ、宿営地に連れていってやるから』

『はは、…っ、も…むりだ…よ』

『明日を信じるんだろっ！』

『そ…んな……こと…って…も』

止まることを知らない血を見ながら、向日葵は乾いた笑いをもらす。そこにあるのは、同じ赤でも太陽とは全く違う、暗い暗い、紅。

『お前が明日を信じるって言ったから、俺も信じる気になったんだよっ』

『夢…みな…いつ……て』

『そんなの、もう』

『……、ねえあの丘に……連れて……て』

『……わかった』

『あ…りが……と』

丘の上につき、ゆっくりと向日葵の体を下に降ろすと、あいつは顔をしかめながらも、明るい声で言った。

『ここから…見る太陽……すごく、綺麗だっ…た』
『うん』

『最期…に太陽見たかった…かも』

『……そんな』

『でも、いいんだ。太陽は……明日も…昇るから』

『…』

『次…は、君が……太陽…信じてくれる…んだよ……ね』

向日葵は手をのばし、そこに太陽があるかのように握りしめた。
そして、そのまま彼女は眠る様に逝った。

僕はしばらく、そこで茫然としていた。

そうして、ようやく残酷な事を言われたことに気付く。

僕が信じたのは、太陽を、明日を信じ続けた向日葵だったのに。

それでも、それが最期の願いなら、叶えずには入られない。
だから僕は、いつ失われるとも知れない、明日を信じると決めた。

陽のもとに咲く花のようだった、君のために。

End .

（後書き）

ご覧頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5604j/>

Sunflower

2011年1月16日08時12分発行